

町史

ついでおきの話

199

長岡・河井継之助記念館友の会会員
高梁方谷会会員

小名 泰裕

河井継之助が愛した風景

▼今月号から小名さんによる6回の歴史連載がはじまります。埼玉県の本田技研工業(株)に勤務、戊辰戦争にまつわる史跡を訪ね、歴史を探る行動は神出鬼没、幕末志士を追って日本中を駆け巡っておられます。

▼河井継之助の魅力に惹かれて毎年来町され、只見の墓前祭でもおなじみの方です。

▼『戊辰戦争を歩く』(光人社)「長岡・只見を歩く、上野戦争」を執筆。週刊朝日別冊MOOK『週刊司馬遼太郎Ⅱ「峠」の世界八十里越』にも登場されています。

▼全国的な視野から見た只見のついでおきを語っていただきます。

「あと30分で、只見の宿ですね」と、私が言うと、同乗者が「早く冷えた花泉が呑みたいものだ」と答える場所があります。そして、少し休憩をとり、田子倉湖を遠望するところでもあります。そこは、六十里越開道記念碑の石碑が立っている場所で、国道252号線が開通したときに建てられたものです。碑を読むと、昭和48年9月11日建立とあります。すでに、私は小学校に通っている頃で、それほどの昔ではないのです。今の高校生に、戦後の映像を見せて違和感がなくなる年代はと訊くと、「昭和45年の大阪万国博覧会のフィルムのところからですね」と答えるそうです。しかし、昭和48年になって開通したところに只見の辛さがあるのです。

「あと30分で、只見の宿ですね」と、それは河井継之助記念館です。この記念館は、六十里越国道の開通よりも早く昭和41年に開館しています。河井継之助ファンである私は、記念館の手前の叶津番所で蒲生岳を見上げるときに、「瀕死の継之助は、この山を見ることができたのだろうか」と、物思いにふけます。蒲生岳は雪食地形を象徴する只見町を代表する山で、会津のマッターホルンとも呼ばれています。只見は、河井継之助ファンにとって聖地のような場所ですが、一般の旅行者から見るとごく標準的な風景ではないかと思えます。唯一、雪食地形により急峻な山々がある点や全国屈指のブナの天然林があることなどが他の山間農村地と異なります。さて、継之助ファンが、只見の風景が何処かに似ていると問われれば、間違いなく岡山県高梁市と答えます。幕末時、河井

継之助の師、山田方谷がいた備中松山藩の地です。継之助も半年間、方谷のもとで『経世済民』について学んでいます。備中松山は、高梁川の両岸を山で挟まれた地で、城下町付近だけがわずかに開けている程度です。継之助が方谷のもとにいた長瀬の塾は、只見より、はるかに両岸の山が迫っています。日の出が遅く日の入りが早いのです。これは、高梁川の流量が少ないため大きな洲ができず、川幅が狭いためです。

河井継之助が、塩沢で亡くなる直前、傍にいた用人に、「継之助は、『方谷先生の云いつけを守った』と伝えてくれ」と話し、また、継之助の愛弟子、外山脩造には、師の方谷先生の教えを語っています。

「俺が死ぬば、侍は終りよ。寅(外山脩造)や、お前は商人になりやっさい」と言っているのです。

継之助は、只見の風景を見て、備中松山、長瀬の塾のことを思い出したに違いありません。師の山田方谷は、河井継之助の死を知り、のちに、河井家か

この二つの山間の地を方谷と継之助が結びつけました。只見、高梁の両地は、河井継之助が生まれ育った越後平野、長岡の城下町にはない風景なのです。

備中松山は、高梁川の両岸を山で挟まれた地で、城下町付近だけがわずかに開けている程度です。継之助が方谷のもとにいた長瀬の塾は、只見より、はるかに両岸の山が迫っています。日の出が遅く日の入りが早いのです。これは、高梁川の流量が少ないため大きな洲ができず、川幅が狭いためです。

河井継之助が、塩沢で亡くなる直前、傍にいた用人に、「継之助は、『方谷先生の云いつけを守った』と伝えてくれ」と話し、また、継之助の愛弟子、外山脩造には、師の方谷先生の教えを語っています。

「俺が死ぬば、侍は終りよ。寅(外山脩造)や、お前は商人になりやっさい」と言っているのです。

継之助は、只見の風景を見て、備中松山、長瀬の塾のことを思い出したに違いありません。師の山田方谷は、河井継之助の死を知り、のちに、河井家か



▶山田方谷の長瀬の塾(現JR方谷駅)からみた風景。丸は、河井継之助が見送る方谷に礼をした見返りの大榎